

国
語

問題冊子

注意事項

試験開始の合図があるまで、この冊子を開けないこと。

- 1 この冊子の本文は11ページまでである。印刷の不明な箇所、ページの脱落などがあつた場合は申し出ること。
- 2 解答は、問題ごとに、答案用紙(別紙)の所定の欄に記入すること。
- 3 答案用紙は、その一、その二、の二枚である。それぞれに、受験番号と氏名を記入すること。

記入例

受験 番号	氏名
1	大塚 茶織
2	
3	
4	
5	

- 4 答案用紙の解答欄上部の点線枠内には何も記入しないこと。
- 5 この問題冊子及び下書き用紙は持ち帰ること。

次の文章を読んで、問(一)～(七)に答えよ。

欧米諸国や日本の人びとが捨てた不用品は、タンザニアを含む発展途上国に輸出され、SDGs が叫ばれるよりもはるか以前から、モノの寿命限界までリユースやリサイクルされてきた。タンザニアでは現在でも、中古車や中古家電、古着など中古品が人びとの消費生活において重要なウェイトを占めている。タンザニアの消費者が購入した中古品は、彼らの隣人や友人、故郷の親族へ贈られたり、生活に^(a)コンキユウして転売されたり、金銭を借りる担保にされたりする。贈られた中古品がさらに別の誰かに贈られたり、担保として友人に預けたモノが買い戻されたりもする。誰かがひとたび所有したモノが贈与や転売を通じて別の誰かの所有物となる。それが何度も繰り返されることで、モノは「私のもの」「誰かのもの」「さらに別の誰かのもの」「ふたたび私のもの」などと変化を遂げながら、社会の中で循環してきたのだ。

こうした循環が起きているのは、ある面では新品の商品を購入する能力が不足しているからであり、豊かな者から貧しい者へと富が分配されることを是とする社会規範があるからである。またある面では、手に入れた財を転売したり投資したりしながら、「自転車操業的」に営むインフォーマル経済がひろく展開しているからである。

いずれの場合でも重要なのは、「私のもの」が「他の誰かのもの」に変化する際、そのモノは、それを一時所有した「私」から切り離された無色透明の「モノ」になるわけではないことである。

人類学者のアルジュン・アパデュライは論集『モノの社会生活 The Social life of Things』において、モノの価値は、使用価値だけでなく、モノの社会的履歴に伴って変化する交換価値によっても決まることを論じた。私たちの身近な例で説明すると、わかりやすいだろう。たとえば、ある骨董品店こつとうひんてんで売られている万年筆は、すでに書くという行為には使えないとしよう。だが文豪に使用されていたという万年筆の社会的履歴によって、そのモノは非常に高価なものになっている。もし、その万年筆の履歴に恋人から文豪へ贈られたというロマンスが発見されれば、その価値はより高くなるだろうし、万年筆を購入した富豪が次々と不審な死を遂げたという履歴が明らかになれば、呪われた万年筆としてその価値は下がるだろう。

同じことは、文豪やセレブリティによる所有に限らずに生じる。論集に寄稿したイゴール・コピトフが述べる通り、車などの日用品から美術品、^(b)ドレイなどのヒトを含め、多くのモノや財は「個人化・人格化 individualization」と「商品化」を行き来している。それぞれの文化的な履歴には、⁽¹⁾そのモノにまつわるさまざまな関係性が埋め込まれている。そして、ひとたび誰かのものでされたモノが再び商品化される時、そのモノは、そのモノの履歴に関係する人びとのアイデンティティを帯びることもあるのだ。

元の所有者や関係者のアイデンティティがモノに付帯するという考え方は、人類学ではとりわけモノが贈与される場面において強調されてきた。そのような議論の^(c)タンチョは、マルセル・モースの『贈与論』におけるマオリの贈り物の霊「ハウ」をめぐる謎だ。よく知られている通り、モースは、贈り物に返礼が起きるのは、贈り物にとり憑いた霊「ハウ」が、元の持ち主のもとに戻りたいと望むからであるとするマオリのインフォーマント(情報提供者)、タマティ・ラナイピリの説明にこだわった。モースは彼の説明を手がかりに、マオリの法体系において、モノを介して形成される^(d)紐帯は「魂と魂との紐帯」であり、「何かを誰かに贈るといふことは、自分自身の何ものかを贈ることになる」と論じた。なぜならモノには元の持ち主、贈り手の魂が宿り、元の持ち主は贈り物を介して受け手に影響力を発揮しているからである。

ハウをめぐるモースの議論はさまざまに再検討がなされ、いまだハウとは何かをめぐる議論が続くが、贈り物に持ち主の人格が宿っていること自体は、私たちにも経験的に理解できることである。

たとえば、日本では、恋人からもらった手編みのマフラーを誰か別の人に贈ったり売ったりすることは^(e)キヒされがちだ。それは、そのマフラーにマフラーを編んだ恋人の思い、すなわち魂が込められているように感じられるからだろう。恋人がデートで選んだ商品でさえ、そこに「彼／彼女らしさ」、すなわち贈り手の人格が憑いていると感じ、不要になっても捨てるのを躊躇する人は多いだろう。別れた恋人の贈り物を捨てるという行為が、そのモノとの関係だけでなく、そのモノを媒介にして恋人への執着と決別するという儀式になるのも、モノが元の持ち主のアイデンティティやその持ち主と受け手が共有する何がしかを帯びていると考えるからだろう。

こうした贈り物に与え手の人格の一部が宿っているといたヒトとモノとの分離不可能な関係を論じてきた人類学は、「個人」が所有物に対して排他的な権利を有するという、個人の「身体Ⅱ労働」を基盤とする私的所有論の考え方に対して異議を提示してきた。

モノの社会的履歴、そしてモノに付帯して循環する持ち主たちの人格は、所有(私的所有)と他者への贈与や分配を対立するものとみなす議論に再考を促す。すなわち、法的な権利とはべつに、贈り物をエージェントにして受け手に働きかけ続ける元の所有者は、その贈り物の所有権を放棄したと言えるのだろうか。そのモノはいまだ持ち主に帰属しているのではないか。^②「譲渡不可能」な贈り物とはいかなるもので、それはいかにモノとヒトとの関係を取り結んでいるか。これらの問いは必然的に、さまざまな角度から「自己」とは何かをめぐる問いも喚起してきた。

たしかに松村圭一郎がエチオピアの農村社会を事例に論じた通り、タンザニアのインフォーマル経済従事者のあいだでも共同(集団)所有か私的(個人)所有か、あるいは所有権が認められているか否かといった慣習的、法的なルールだけでなく、何をどこまで他者に分け与えたり、他者と共有したりするか、いかにして譲り渡すのを回避するかをめぐるマイクロな攻防がモノの所有をめぐる大きな関心であることは間違いない。実際、タンザニアのインフォーマル経済従事者は金銭や動産、不動産として所持しているモノは少ないものの、それらのモノや財を金銭的価値に換算したり、それらを排他的に使用したり、他者に自由に販売したり担保にしたりする「所有権」を十全に理解している。だが、明らかに自身に所有権がある場合でも、「譲ってくれ」「共有させてくれ」という要請を心情的あるいは社会道徳的に断ることができず、モノや財を手放すことは多々ある。そうした事態は、「私的所有の失敗」のように見える。

しかし、先述したように、元の所有者がモノを媒介として財を譲り受けた者たちに働きかけていることを前提とすると、私的所有に失敗することを「損失」とみなし、贈与や分配を「利他的な行為」である^③とみなす必然性はどこにもない。そのような所有と贈与を対置させる見方は、^③身体^③のなかに閉じ込められた自己、自己と身体との同一視を前提とした考え方に過ぎない。

タンザニアのインフォーマル経済従事者は、所有物(資本)を基盤にし、その蓄積を目指す経済の運動において、モノをあえて手放し、財をヒトのかたちで蓄積する。そうすることで彼らは、所有を基軸にして評価され、承認される世界を、どれだけ多く自身の分身をもつヒトを創ったかで評価され、承認される世界へと転換している。

多くの貨幣や富を蓄積しなければ、役職や地位を得られなければ、何らかの成果を出さなければ、他者から評価されず、特別な人間として承認されない資本主義経済を他者と競争しながら生きていくのは大変だ。所有に過度に縛られずに生きていけないものかと思う。だが、テクノロジを介した交換や共有のしくみが発展し、誰もがその時に必要とするモノやサービスにアクセスできる世界ができれば、私たちは自由に楽しく生きていけるのだろうか。使用頻度が低いモノを皆で共有する、遊休資産を有効活用する、不用品を融通しあう、互いのスキルを交換・シェアする。そのときに「私らしさ」は、どこに宿り、誰に承認されているのだろうか。

正直な話をしよう。私は、論文や本が評価されたら嬉しいし、競争に勝つと誇らしいし、富や力を手に入れたら、してみたことが山ほどある。資本主義経済にどっぷり浸かっているので、これらの評価は承認欲求を満たす上で大事だ。だが「もし大学の先生になれなかったら、タンザニアで俺たちと一緒に商売をしたらいいさ。食べていくだけなら何とかなるよ」といつも励ましてくれた友人たちによる承認は、それとは異なる種類の喜びがある。何かをなし得たらそれは評価されたいが、私が何をなし得たのか、何を獲得したかに関係なく、他とは違う「私」として承認されたい。我ながら、じつに欲張りな人間だ。

だがタンザニアの友人たちも同じことを言う。彼らは「いつか成功したい」「あいつにだけは負けたくない」「豊かになりたい」と毎日のように口にする。他方で、富を独り占めして孤独になるくらいなら、たとえ零細商人のままでも、「君だから安くしておくよ」「君からはお代なんてもらえない」「ただ君が生きていてさえくれればそれでいい」とあちこちで感謝されながら生きるはずがいいとも言う。ヒトは、その時々で矛盾した気持ちを抱える。

打算的であり、かつ寛大でもあり、個人主義的であり、かつ共産主義的でもあるというモースの贈与論は、矛盾した極を往還し、その間で思考することが要だった。⁽⁴⁾タンザニアのインフォーマル経済従事者も同じように矛盾を往還し、その間で解を

探っている。「資本主義が終わるよりも世界が終わるほうが容易に想像できる」(フィッシャー)の⁽⁵⁾であれば、資本主義経済の中で生きていくためにこそ、自身の人格が宿るような贈与をし、自己の一部を身体の外側へと届け、資本主義経済で承認される自他の区別とは違う形で自己を確立する余地を広げておく必要がある。

私的所有という概念とは違う「所有」の想像力、身体のうち⁽⁶⁾に完結した個人とは違う「自己」の想像力。それはここで検討したものの他にも、検討しなかった民族誌的事例を含めていろいろなバリエーションがある。そこから所有しても所有しなくてもよい社会の糸口を探っていくことがこれからの課題だ。

(小川さやか他著『所有とは何か——ヒト・社会・資本主義の根源』により、一部省略・改変して用いた。)

注 ○インフォーマル経済―法令上の保護や規制を受けていない非公式な経済活動。

○アルジュン・アパデュライ―Arjun Appadurai(一九四九〜)。インド出身のアメリカの人類学者。

○イゴール・コピトフ―Igor Kopytoff(一九三〇〜二〇一三)。アメリカの人類学者。

○マルセル・モース―Marcel Mauss(一八七二―一九五〇)。フランスの社会学者、人類学者。

○タマティ・ラナイピリ―Tamati Ranaihiri(生没年未詳)。ニュージーランドの先住民。

○松村圭一郎―一九七五〜。日本の人類学者。

○遊休資産―事業内容の変更等の理由で利用されていない資産。

○フィッシャー―Mark Fisher(一九六八〜二〇一七)。イギリスの批評家。引用は『資本主義リアリズム』の一節。

問(一) 傍線(1)「そのモノにまつわるさまざまな関係性が埋め込まれている」とあるが、ここでいう「関係性」とはどのようなものか説明せよ。

問(二) 傍線(2)「『譲渡不可能』な贈り物」について、なぜ不可能なのか説明せよ。

問(三) 傍線(3)「身体のかなに閉じ込められた自己」とあるが、この場合の「自己」とはどのようなものか、本文の趣旨にそって説明せよ。

問(四) 傍線(4)「タンザニアのインフォーマル経済従事者も同じように矛盾を往還し、その間で解を探っている」とあるが、どのような「矛盾」を往還しているのか説明せよ。

問(五) 傍線(5)「資本主義経済の中で生きていくためにこそ、自身の人格が宿るような贈与をし、自己の一部を身体の外側へと届け、資本主義経済で承認される自他の区別とは違う形で自己を確立する余地を広げておく必要がある」とあるが、筆者がこのように述べる理由を説明せよ。

問(六) 傍線「所有しても所有しなくてもよい社会の糸口を探っていくことがこれからの課題だ」とあるが、現代社会において所有という概念に変質は生じているだろうか。これに関連する具体例を挙げて、あなたの考えを述べよ。字数は三百字程度とする。

問(七) 傍線(a)～(e)の片仮名を漢字に直し、漢字は読みを平仮名で記せ。

大井三位は、兵衛の督（兵衛府の長官）で宰相もつとめていたが、酒乱癖があり、宮中で乱酔したことにより官職を解かれ、北の方と姫君を連れて都の郊外で引き籠もつて暮らしている。そのような三位のことを、親友の右大臣は常に気に掛けている。以下の文章を読んで、問(一)～(五)に答えよ。

今年筑紫の帥つか闕けたれば、いかでこの君をとおほして、「帝には我よきに奏し侍らん。御年も今盛りなるを、ひたぶるに世を思ひ捨て給ふらんことは、ゆめゆめあるまじきことなり」とて、たびたびこしらへ聞こえ給ふ。「一たび二たびこそあらめ、昔を忘れぬ御心より、かく切にのたまひわたるを、人の御心をも知らず顔に、我が思ふ心のみ立てんは、かへりて心浅きわざなり。まして、男子世にあらんに、⁽¹⁾己を知る人あらざらんをりこそ、蓬が下に空しく朽ちも果てめ、志をも立てて、身をも起こしつべき時至れるを、いかで徒らに過ぐすべき事かは。今は大臣の御心にそむかじ^(a)」とのたまへば、「かく世離れたる窓のうちに、さうざうしく明かし暮らさんよりは、花やかなる世を経て、賑はしき月日を送り迎へんこそ、いふかひあるわざに侍らめ」とて、北の方も喜び給ひて、内々にその御心まうけなどあるを、姫君は一人御心ゆかぬやうにぞおはすめる^(b)。さるは、住みなれし都をふりすてて、千里の空にあくがれんことを心細くおほすにやとて、さまざま言ひ慰め給へば、「心づくしの海は遥かなりとも、御辺り離れず伴はれ奉らんに、何か憂き事の侍らん。また時いたりて、御身の世に出で給はんは、誰も誰も願はしきすぢ^(c)にて、いと嬉しきものから、ただひとつ安からず思ひ給へらるることの侍るを、聞こえではえあるまじけれど、言ひいでんもさすがにて、心のうちにのみなん思ひ続け侍る。そもそもこたびの御つかさは、おほかたの受領の、品卑ひくく事狭きたぐひとは異⁽¹⁾にて、つかさづかさのかみ上に立ち給ひて、万の事執り総かみね給はんには、おほかの人々、ただ一所にこそなき奉るべきを、酒にのみ御心よせ給はば、⁽³⁾誰もうへにはそむきまゐらせずとも、したにははたいかでかよく従ひ奉るべき。しか侍らんには、ゆくりなく御身の咎とがめ負ひ給ふべきふしも出でまうでこずやは侍るべき。今より堅くこの御すさみとどめ給はばこそあらめ、もしとどめ給はざらんには、⁽⁴⁾このつかさ辞し給ふぞ後ろ安きわざに侍るべき」とて、押し立ちてのたまふ。

（『竺志船物語』により、一部改変して用いた。）

注 ○筑紫の帥―太宰府の長官。 ○この君―大井三位を指す。

○我よきに奏し侍らん―私(右大臣)が良いように申し上げましょう。 ○御つかさ―筑紫の帥の職を指す。

問(一) 傍線(1)はどのようなことを言っているのか説明せよ。

問(二) 傍線(2)を現代語訳せよ。

問(三) 傍線(3)を現代語訳せよ。

問(四) 傍線(4)は、なぜそのように言っているのか説明せよ。

問(五) 二重傍線(a)と(c)について、文法的に説明せよ。

(例)受身の助動詞「らる」の連体形

次の文章を読んで、問(一)～(四)に答えよ。

洛陽^{らくやう}処^{をリ}天下^{てんか}之中^{ちゆう}、挾^{さしは}崤^こ黽^{みん}之^の阻^そ、当^{リテ}秦^{しん}隴^{ろう}之^の襟^{きん}喉^{こう}、而^{して}趙^{てう}魏^ぎ之^の走^{そう}集^{しふナリ}。蓋^シ四方^{ひつ}必^そ争^{そう}之地^ち也^{なり}。天下^{てんか}当^{リテ}無^レ事^{キニ}則^チ已^ミ、有^{ラバ}

事^{コト}則^チ洛陽^{らくやう}必^ズ先^ツ受^ク兵^ヘ。余^{われ}故^ニ嘗^テ曰^ク、「洛陽^{らくやう}之^の盛^{せい}衰^{すい}、天下^{てんか}

治^ち乱^{らん}之^の候^{こう}也^{なり}。」方^方唐^{たう}貞^{ちん}觀^{くわん}・開^{かい}元^{げん}之^の間^{かん}、公^{こう}卿^{けい}貴^き戚^{せき}開^{かい}館^{くわん}

列^{れつ}第^{だい}於^{スル}東^{とう}都^と者^者、号^ス千^{せん}有^有余^よ邸^{てい}。及^及其^其乱^{らん}離^り、繼^{つぎ}以^テ五^ご季^き之^の

酷^く。其^其池^ち塘^{たう}竹^{ちく}樹^{じゆ}兵^{へい}車^{しや}蹂^{じゆう}躐^{しやく}、廢^せ而^{して}為^リ丘^{きう}墟^{きよ}、高^{かう}亭^{てい}大^{たい}榭^{しゃ}煙^{えん}

火^{くわ}焚^{ふん}燎^{れう}、化^{シテ}而^{して}為^リ灰^{かい}燼^{じん}、与^レ唐^{たう}共^ニ滅^{シテ}而^{して}俱^ニ亡^ビ、無^シ余^{あます}処^{なり}矣^{なり}。

余^{われ}故^ニ嘗^テ曰^ク、「園^{えん}囿^{いう}之^の興^{こう}廢^{はい}、洛陽^{らくやう}盛^{せい}衰^{すい}之^の候^{こう}也^{なり}。」且^ツ天下^{てんか}

之^の治^ち乱^{らん}、候^う洛陽^{らくやう}之^の盛^{せい}衰^{すい}而^{して}知^リ、洛陽^{らくやう}之^の盛^{せい}衰^{すい}、候^{ヒテ}園^{えん}囿^{いう}之^の

興^ニ廢^一而得。則「名園記」之作、余豈徒然哉。嗚呼、公
 卿大夫方進於朝、放乎一己之私、自為之、而忘天下
 之治忽、欲退享此、得乎。唐之末路是已。⁽³⁾

(『文章軌範』李文叔「書洛陽名園記後」による)

注

- 洛陽―地名。中国の古都。
- 嶠岬―嶠山と岬山。
- 秦隴―中国西部の地名。
- 襟喉―急所。大切なところ。
- 趙魏―中国北部の地名。
- 走集―交通の要所。
- 候―きざし、しるし。
- 貞観・開元―唐の元号。
- 公卿貴戚―高官高位の人と貴族の親類。
- 開館列第―邸宅を建て連ねる。
- 五季―唐末に興った五つの王朝。
- 東都―洛陽の別称。
- 邸―助教詞。
- 蹂躪―踏みにじり、蹴立てる。
- 池塘―池のまわりの土手。
- 蹂躪―踏みにじり、蹴立てる。
- 丘墟―荒れはてた遺跡。
- 高亭大榭―立派なあずまやとたかどの。
- 焚燎―焼く。
- 園囿―庭、庭園。
- 徒然―無意味なこと。
- 大夫―広く官位を有する者をいう。
- 治忽―治乱。

問(一) 傍線(1)「方」、(2)「俱」、(3)「已」の読みを記せ。

問(二) 傍線(ア)「天下当無事則已、有事則洛陽必先受兵」を訳せ。

問(三) 傍線(イ)「忘天下之治忽、欲退享此、得乎」をすべて平仮名で書き下せ。現代仮名遣いでよい。

問(四) 本文に基づき、天下の治乱と洛陽の園囿の興廢との関係についてまとめ、文章の趣旨を説明せよ。